令和８年度第２回一関市食育推進協議会　会議録

１　会 議 名　令和８年度第２回一関市食育推進協議会
２　開催日時　令和８年10月１日（木）午後２時から午後３時30分まで
３　開催場所　一関保健センター 栄養指導室
４　出 席 者
⑴　委　員　小野寺拓也委員（会長）、佐藤律子委員（副会長）、
佐藤一則委員（代理：菅原聡氏）、三浦智恵美委員、大森亘委員、
林苗子委員（代理：小山淳子氏）、小山祐二委員、千葉美穂委員、
菅原雪枝委員、田中久美子委員（代理：豊間根正明氏）、岩渕三枝子委員、
石田かつこ委員、千田広子委員
※欠席者　伊東陸子委員、及川善行委員、堀込真委員
⑵　事務局　佐藤和幸健康こども部長、佐藤幸一健康こども部次長兼健康づくり課長、
伊藤睦哲健康づくり課長補佐兼健康増進係長、
畠山陽介健康づくり課主任保健師、佐藤千尋健康づくり課栄養士、
小野寺晴香健康づくり課栄養士、坂本寿究子こども家庭課長、
岩渕芳枝こども家庭課栄養主任主査､山田綾学校教育課長補佐兼保健係長、
木村幸子学校教育課長補佐兼栄養主任主査
５　議　　題
⑴　報　告　　第４次一関市食育推進計画最終評価について
⑵　協　議　　いちのせき健康づくり推進計画（仮称）について
⑶　情報交換　食育の取組について
⑷　その他
６　公開、非公開の別　公開
７　傍 聴 者　なし
８　小野寺拓也会長挨拶

本日はお忙しい中、一関市食育推進協議会に御出席いただき誠にありがとうございます。また、委員の皆様並びに事務局の皆様におかれましては、日頃より一関市の食育推進に関して、多大なる御理解と御尽力をいただきありがとうございます。

私は「道の駅厳美渓」で産直を経営しておりますので、農業の話をさせていただきます。ここ数年、毎年のように異常気象により農作物への被害が起きています。今年は千葉県で水害が何度もあり、人的被害の他に農業や農産物などの第一次産業に大きな被害が出ております。今現在、スーパーマーケットに並んでいる人参は北海道産が多いです

が、これから冬にかけては千葉県産の人参が非常に多く流通します。おそらく、今年の冬は非常に値段が高くなる、あるいは流通が難しい状況になる可能性もあります。

また、異常気象だけでなく、毎年クマの被害や地震の被害も農産物の収穫量の減少につながっており、普段私たちの食卓に並ぶ食材が、当たり前に手に入るとは限らない時代が来ていると感じています。このような獣害や天候不順だけでなく、第一次産業の担い手自体が高齢化しており、次の世代の方が、なかなかその問題を注視しないという危機もあります。次代を担う子どもたちにも、この経緯を理解してもらいながら食に関する感謝を持っていただければと深く考えております。

これからも引き続き、委員の皆様を中心に食育推進に関しまして御尽力いただきますようお願い申し上げます。本日は限られた時間ではありますが、忌憚のない御意見、御質問を投げかけていただきますようお願い申し上げます。

9　審議内容

⑴　報　告

第４次一関市食育推進計画最終評価について

資料に基づき事務局から説明を行った。質疑応答等なし。

⑵　協　議

いちのせき健康づくり推進計画（仮称）について

資料に基づき事務局から説明を行った。質疑応答等なし。

⑶　情報交換

食育の取組について

委員一人一人から、所属団体等での食育推進の取組について情報交換を行った。

委　員　ＪＡいわて平泉では、食に関する教育ということで管内の小学校を対象に野菜の提供などをしており、あわせて女性部や青年部など関係団体の方からの協力をいただいている。今後も食と農に関する部分では中心的な組織だと感じているため、引き続き食育の取組を進めていきたいと思う。

委　員　給食分科会では、市内の保育園の栄養士や調理員が集まり、栄養や食育に関する勉強会を行っている。情報交換した内容を各園に持ち帰り食育を実施している。

当園では大学と協力し合いながら、運動にも力を入れている。

栄養士は毎日なるべく各教室を巡回して、食育活動を行っている。その中で家庭との連携がとても大切だと思っているが、働く保護者が多いこともあり、肥満児や虫歯の子どもが増えてきていることが今の課題だと思っている。そのような課題も含めて今後も取り組んでいきたいと思う。

委　員　食育に関する学校の取組は大きく五つあり、そのうち二つは市教育委員会や給食センターとタイアップして取り組んでいる。

一つ目は、給食センターの栄養士が学校の各クラスで行う食育指導である。また、給食センターは希望献立というものがあり、小学６年生を中心に希望する献立をお願いし、学校の放送で紹介している。献立表の中には「給食だより」のように食育に関する内容も掲載しているため、毎月の周知や食育指導を行っている。

二つ目は言葉の指導と食をタイアップさせている絵本給食である。食にまつわる絵本の読み聞かせをして、その日の絵本に登場した料理が、給食のメニューとして提供されるという内容である。子どもたちは大変喜び、楽しみにしている。

また、学校での取組の一つ目は給食試食会で、小学１年生の保護者を対象に親子で給食を食べる行事を行っている。保護者からは子どもの頃以来久しぶりに給食を食べたという感想が聞かれ、とても好評な取組になっている。昨年度はコロナの影響で給食試食会を行ったことがないという小学６年生の保護者のリクエストで、小学１年生だけでなく小学６年生の保護者にも給食試食会を行った。

二つ目は日々の給食指導である。１か月ごとの職員会議の中で給食担当者が来月の給食指導の内容を決めた後、給食の時間や学級指導で食にまつわる指導を行っている。

三つ目は養護教諭あるいは給食担当者が年２回程度行っている健康調査である。その中に朝食を食べているかの項目があり、保護者への食の啓発を行っている。

これまで勤務した学校で朝食を食べずに登校する理由について調べたことがある。記憶では１週間全く朝食を取れないという家庭が結構あった。しかし、学校としては強く指導できないため改善につながらない。母親の勤務が夜勤である場合や、友達が朝早く迎えに来てしまうため食べる時間がなかった、スポーツ少年団に所属したが、帰宅時間が遅く夕食の時間も遅くなるため、翌朝になってもお腹が空かないという理由であった。

朝食をしっかり食べている子は１日元気で、勉強や運動を得意とする傾向があると感じている。

委　員　高校では家庭科の食物分野の授業の中で勉強する時間はあるが、３年間のうちほんの一部しか触れる機会がない。高校では保健室から保健だよりとして、

栄養に関しての情報を生徒に提供している。高校生は中学生の頃とは違い、給食ではなくお弁当になり、自分のお金で食べ物を買って食べるという機会が多くなる。また、部活動によって運動量もかなり変わるため、食事の量も個人差が大きい時期になる。さらにスマートフォンをほとんどの生徒が持つようになり、朝起きられず朝食を抜くなど、生活リズムが乱れる生徒も多くなる。

家庭ごとの差も大きく、保護者が多忙な家庭や経済的に困窮している家庭の場合、買ったものだけを毎日食べている生徒やお弁当を持ってこない生徒もいる。

保護者の協力がないと家庭での生活までは指導しきれない現状ではあるが、高校を卒業すると、ほとんどの生徒が食に関しては自己管理をしていかなければならない。そのため、卒業後の自己管理ができるような内容を心がけて家庭科の授業で指導を行っている。

委　員　ある児童養護施設の食育について紹介する。児童養護施設の基本的な生活様式は、建物の中にワンルームで６人ずつの部屋で過ごすパターンと、全員が一緒に生活するパターンの二つがある。

はじめのパターンでは栄養士と調理師がいるが、調理したものを食堂へ運ぶだけでは食育にならない。そのため、時々各部屋の台所を活用し、子どもたちが調理から食事までを行う機会を設けている。調理師も時々様子を見に行くことでコミュニケーションを取りながら食育を実施している。また、たくさんの方々から農産物をいただく機会があるため、その話もしながら調理を行っている。

二つ目のパターンでは、栄養士と調理師がいないため、職員と子どもたちで話し合いながら予算や献立を考え、技術や知識を身につけながら調理をしている。

児童養護施設の最大の課題は、18歳になると児童養護施設を退所しなければならないことである。そのため、食に関して自立する力をつけるための取組を行っている。

委　員　市内の六つの給食センターの栄養教諭、県立の特別支援学校の栄養士、教育委員会の職員で構成している学校給食部会では、年に６回から７回の研修会を行い、子どもたちの健康課題改善に向けた取組を進めている。望ましい食習慣の形成のためにどのようなアプローチが良いかを考えながら、小学生向けの分かりやすいＤＶＤの教材作成や保護者向けのコラムの作成などに取り組んでいる。

給食センターでは、児童・生徒の実態や健康課題に合わせて食に関する指導に取り組んでいる。

児童や生徒は食に関する知識はあっても実践につなげることが難しいため、課題を自分事として捉え、改善につなげられるような指導教材の検討について栄養士間で協力し合いながら進めていきたいと思っている。

委　員　岩手県栄養士会としては、毎年農業祭で減塩や野菜摂取についての普及啓発活動を行っている。先日はシニアのフレイル予防をテーマに講師を招き、実際に食品カードを使って献立を立てるという講座を開催した。多くの方が健康な毎日を送れるようにしたいという思いから取組を進めている。

保育園では、ピーマンを種から育てて収穫した後、ピザを作るという食育活動を行った。子どもたちからは「美味しかった」という声が聞かれた。昨年も実施したが、参加した子どもの保護者からは「ピザ作りに参加したことで子どもがピーマンを食べるようになった」という嬉しい話も聞かれたため、今後も続けていきたいと思っている。

また、日本の伝統食である梅干し作りの見学や、味噌作り体験なども行っている。味噌作りは、大豆を育てた後に親子で豆をつぶして作ったが、子どもたちが「味噌や味噌汁を好きになった」という声も聞かれている。

引き続き､食を楽しむ心を持った子どもたちを育てていきたいと思っている。

委　員　岩手県の食育施策では令和８年度から令和12年度にかけて第５次岩手県食育推進計画がスタートした。基本目標を「全ての県民が生涯にわたり、健全な食生活を営み、心身ともに健康でいきいき暮らしていくこと」としている。４本柱で構成されており、一つ目が、望ましい食習慣の形成、二つ目は食の安全安心、三つ目が食料供給県としての特性を生かした食育、四つ目が地域に根ざした食育ということで取組が進められている。

県の課題としては朝食の欠食や若い世代の食生活の乱れ、食文化継承の機会減少、食品ロスへの対応などが挙げられている。近年のトピックスとして、ＳＤＧｓの視点を取り入れた食育が維持されており、食品ロス削減や環境に配慮した食生活、地産地消の推進、持続可能な食料生産への理解促進などが計画に位置付けられている。岩手県は広大な土地があり、農林水産業が盛んな地域特性を生かして学校や地域における農林漁業体験、生産者と消費者の交流、郷土料理や食文化の継承にも力を入れている。

食育は健康づくりだけでなく、食品ロス対策、地産地消、孤食の対策、地域共生の社会づくりなど複数の行政機関を横断する取組として位置付けており、

生活習慣病予防や母子保健、歯科保健、食品衛生、地域の健康づくりなど既存事業の中で食育の視点を取り入れながら、市町村や関係団体の皆様との連携を図っていきたいと考えている。

委　員　保健推進委員東山支部では１年に１回、健康セミナーを行っている。今年度は10月に開催予定である。食生活改善推進員から食事の提供をしていただき、その後に血圧測定をして医師の講演を聞くという内容である。

岩手県は減塩がなかなか進んでいないため、塩分測定器を活用した味噌汁の塩分濃度測定や減塩に関するリーフレットの配布を行うこととしている。

委　員　岩手県歯科衛生士会では、日本歯科衛生士会の地域歯科衛生活動助成事業の一環として、各地域の食生活改善推進員を対象にした食べる機能体験研修会事業を企画して実施している。研修会のテーマは「美味しい食事はお口の健康から～お口はリズミカルに動いていますか～」というオーラルフレイル（口の機能の衰え）に関する内容である。オーラルフレイル予防の重要性、バランスの取れた食生活の定着に向けた食べるときの口の動きの体験・演習、日常的に口や舌を動かす仕組みやその役割についての理解を目的としている。

県内各地の食生活改善推進協議会と連携し、地域住民の健康づくりの担い手となる食生活改善推進員が口の機能を学び、日々の活動や地域に生かす取組を行っている。一関市では、５月26日に１度開催し、次回は12月９日を予定している。

委　員　現在、いちのせき農産物アンバサダーは６人で活動している。活動内容は、農畜産加工物のＰＲ活動や８月の地ビールフェスティバルでの野菜クイズの実施、首都圏でのＰＲ活動、レシピ集の作成などである。

食育に関しては市の学校教育課と縁があり、郷土愛を育む食育交流推進事業に関わっている。学校を訪問して調理実習などで郷土愛を深めるために、地元の美味しいものを知ってもらい、将来は一関に帰ってきてもらいたいという思いで活動してきた。

市（いきがいづくり課）で２年ほど前から「いちのせき名人・達人バンク」の登録制度が始まり、郷土愛を育む食育事業ということで登録した。その後、磐井中学校３学年の１クラスから総合学習の時間に食に関して１年間通して勉強したいと話があり、調理実習や野菜クイズの他、ＪＡいわて平泉からナスを提供していただき、お好み焼きを子どもたちと一緒に作って食べるという食育活動を行った。生徒からは「ナスがこんなに美味しいことを知らなかった」という声が聞かれた。食育活動後に、生徒たちが地元の人たちにもっと一関の農

畜産物は美味しいということを知ってもらいたいという思いから、レシピポスターを作成し、市内の農産物直売所で一関夏まつりの間の１か月間掲示していただいた。

授業の際には毎回生徒へ「地元のものを買うことは、その地域の経済を回すことにつながる」と伝え、生徒自身が保護者へ内容を伝えられるよう、声掛けを行っている。

委　員　食生活改善推進員として一関市では令和６年度から令和７年度までベジメータ®を使用した野菜摂取状況調査を行った。その結果、若い世代の野菜摂取不足と、年齢が高くなるにつれて野菜摂取量が多くなる傾向にあることが分かった。野菜摂取量は年々減少が続いており、令和４年度時点で、岩手県民の１日当たりの野菜摂取量は、目標量350ｇを平均70ｇ下回っていた。令和６年度は不足量の平均が100ｇに達する見込みのため、今後更に取組を進めていかなければならない。

県では、今年度から３分クッキングのような短い時間での料理動画や食に関する寸劇を作成する事業をスタートした。一関市では来年度以降の実施を検討している。

委　員　道の駅厳美渓では郷土料理を取り入れた地産地消レストランの運営、地域の農畜産物・地場産品の産直、観光客への一関市の土産販売の３つの取組を行っている。

今年は地産地消レストランでの餅料理を中心に、子ども会や地域の学童クラブなどで餅つき体験を行っている。９月25日には、市教育委員会の事業で舞川小学校の４年生13人が、餅つき体験に訪れた。餅は年齢の高い方が好まれるイメージがあるが、実際は子どもたちも喜んで食べていた。

その際に、なぜ一関市では餅が有名で郷土食となっているかについて歴史を踏まえて説明したが、子どもたちはあまり興味を示さない。しかし、もち米とうるち米の違いを実際に見せたり、あんこ餅を食べているときに、餅やあんこの材料についてクイズを出すなど体験や問いかけをすることで、子どもたちは楽しみながら学んでいた。産直もあるため施設の見学も行っているが、普段の料理で出てくるものの材料を実際に目で見て感じることで、食育につながっていると感じている。

一関市では、産地や生産者を意識して食材を選ぶ者の割合が少ないことが課題として挙げられるため、引き続き道の駅の産直などで食育の取組を進めていきたいと考えている。

10　担当課　健康こども部健康づくり課